桜幻想

1話　出逢い

　避けられるかもしれない。でも【会える】という嬉しさの方が大きくて、ドキドキとわくわくと多大なる不安を胸に秘め、校内への第一歩を踏み出した。
『そうまけい』それが僕が知る唯一の彼の情報。その【憧れの人に会うため】という不純な動機だけでこの学園へとやって来た。憧れは初恋に似ている。僕は彼に魅かれていた。まるで生まれたての小鳥のように。僕にとってすごく大切な人……。
　だけど、学園は広くて道に迷ってしまい、人っ子一人いない。
　はらはらと桜の降り注ぐ中をとぼとぼと歩いていると、ふとある人に目がとまった。
　黒い学ランを身に纏い風紀委員の腕章を付けたその人は、桜の舞い散る景色の中に溶け込んでいて、とても綺麗だった。声をかけるのが躊躇われるほどに……。長身で、凛とした佇まい。とても真摯な眼差し。綺麗という言葉がしっくりくるような端正な顔だち。まるで騎士の様な雰囲気をかもしだしていて、ただ立っているだけなのに僕は彼に惹きつけられていた。
　突風が吹いて桜が舞い上がると、その人は目が釘づけになっている僕に気付いた。
「そこで何をしている？」
　ハスキーボイスでそう尋ねられ、僕は正直に道に迷ったことを話した。
「この学園は広いからな、この時期になると迷子が出るんだ」
　いつまでも聞いていたいような、そんな声に、僕は惹きつけられた。あまりにも綺麗で端正な横顔に見とれている僕を気にかける風でもなく、横を歩きながら先輩はそう呟いた。
　――ここは私立、明星学園高等学校。大学付属の全寮制の男子校。
　僕等の町全体をぐるりと取り囲むように、周囲を山々に囲まれた盆地の中でも割と低めの山の天辺に建っており、麓には閑静な住宅街が広がっている。豊かな自然に恵まれすぎるってほどに恵まれたド田舎にあるが、ちょっと辺鄙なことを除けば条件的にもそんなに悪くもない学校なので、地元ではそこそこに人気がある。緩やかな坂を下って行くと山の中腹には大学があり、希望者は卒業と同時にそこへと引っ越して行く。早い話、エスカレーター式なので面接試験さえパスすればそのまま持ち上がりで大学に入れるのだ。
　僕がその人を凝視しているのに気がつくと、
「何か言いたいことでもあるのか？」
　と、怪訝そうに聞かれてしまった。
「いや、あの、先輩がかっこいいなぁと思って、つい見とれてました」
　僕が正直に話すと、思いがけず先輩はふっと笑みをこぼした。
「お前、面白いやつだな。名前は？」
「高橋千秋です」
「さぁ、着いたぞ。ここが寮だ。もうすでに手紙が来ているとは思うが、明日が入寮式で規則や取り決め、今後の団体生活における、ありとあらゆることについて生徒会長から話がある。その翌日が入学式になっているから、忘れて寝坊するんじゃないぞ」
「はい。どうもありがとうございました」
　僕が頭を下げてお礼を言って顔を上げると、そこにはもう先輩の姿はなかった。
「あっ、名前聞くの忘れてた！」
　きっとまた会えるだろうと思い直し、事前に入学式の案内と共にクラスと寮の部屋番号が通知されていたので、寮に入ってすぐの寮母室で自分の名前と部屋番号を言って、軽く入寮の手続きを済ませてからキーを受け取り部屋へと向かう。これから僕が１年間お世話になる、１階の１２３号室のドアをノックした。
　２人部屋ってことで、ちょっとドキドキしながら待ってみた……が、中からは返事がない。

僕はドアノブを回してそっとドアを開けてみた。鍵はかかっていないが、中には誰もいない。なんだかほっとして緊張が一気に解けた。部屋に入ってドアを閉める。
一人に一つずつということで鍵をもらったけど、まだ部屋を使っている人もいないので鍵はかけていなかったのだろう。とりあえず、床にドラム形のバッグを置き、窓に掛かったカーテンを開ける。春の日差しに彩られた鮮やかな景色が目に飛び込んできた。
こちら側の窓は裏山に面しており、木々の緑が目に眩しい。
「さて、と。どうしよう？」
ルームメイトがいないのに勝手にやってよいものかどうか悩んでいると、いきなりドアが開いてボストンを肩に担いだ人が入ってきた。どうやら中に人がいるとは思っていなかったらしく一瞬すごく驚いた顔をしたが、
「あ。驚かせて悪い、中に人がいるとは思わなくて」
と、すぐに人懐っこい笑みを浮かべる。
「はじめまして」
僕が挨拶をすると、
「はじめまして」
と返し、中に入ってドアを閉める。
爽やかな感じのいわゆるジャニーズ系で、目鼻立ちがしっかりしていて、ちょっと人目を引きそうな顔立ち。凡人で十人並みの僕とは大違い。身長も１８０ｃｍ近くあるのかもしれない。その上スタイルもいいなんて、実に羨ましい。こんな時はいつも神様が不公平だってことを痛感する。一人に何もかも全部を与えるんじゃなくて、僕にも少しくらい分けてくれてもいいんじゃないかとさえ思えてしまう。今更顔は変えられないだろうから、せめてあと５センチ。それが無理なら、贅沢は言わないから、あと２センチ。最低でも１７０センチは身長が欲しいところだ。
「一年間よろしく！」
先手必勝！　まずは良い印象を持ってもらおうと思って、僕はとっておきの笑顔でもう一度挨拶をする。信用は得がたく失いやすし。信用は一瞬にして崩壊するけれど、それを築き上げるのはものすごく大変で、苦労することを僕は知っている。一朝一夕にはどうにもならない。それが信用だ。この世の中、信用や信頼がどれだけ大事かってことを僕は骨の髄まで身に沁みて知っていた。何でもバカ正直に思ったことを言ってしまいがちで、いつもはみ出し者だった僕は一人でも別にかまわないと思っていたが、一年間一つの部屋で寝泊まりするのだ。
ここは頑張ってでも仲良くならなくてはならない。つまりはだ、信用を得る為にはまず第一印象が大切だと思うのだ。
「こちらこそ、よろしく」
僕が予想だにしなかった鮮やかで、向日葵の様な微笑みが返ってきた。
「ところで、どっちを使う？」
２つ並んだ机を指差して僕を見る。
「別にどっちでもかまわないよ」
そう答えると、彼は手近な方の左の机にボストンを置く。
「じゃあ、お言葉に甘えてオレはこっちで。左利きだから。なので、ベッドも左側を使うよ」と、笑う。人付き合いの苦手な僕としては、笑顔を向けてもらうだけでもすごくホッとする。
「じゃあ僕はこっちを使うね。ところで、いきなりで悪いんだけど……ちょっと聞いてもいいかな？」
僕は遠慮がちに、そう問いかける。
「いいよ。ちょっとと言わず、いくらでもどうぞ」
彼は早速、荷解きをしながら快く答えてくれる。
「この学校で風紀委員をしてる人の名前って分かるかな？」

　僕はバッグをベッドに置き、振り向く。すると、一瞬きょとんとした顔をして僕を見て、
「それって自己紹介よりも重要なんだ？」
　くすりと笑って逆に聞き返された。
「あ、そうだよね、ごめん。普通最初に聞かないよね。ちょっと気になってたから……」
　初対面でいきなり恥を晒してしまった。これじゃあ、第一印象はきっと最悪に違いない。つい順番をすっ飛ばしてしまった。とはいえ、さっきの一言で全てがパァだ。もう、何もかもが無駄になってしまった様な気がする。僕が自分の単細胞さに辟易して項垂れていると、
「いや、こっちこそごめん。ほら、普通はまず自己紹介をしてから、っていう先入観があるからさ」
　と、慌ててフォローされてしまった。気を取り直してぺこりと軽く頭を下げ、仕切り直し。
「失礼しました。改めまして、僕は高橋千秋です」
　ほんの一瞬だけ、彼の動きが止まった。でも次の瞬間には、
「オレは森下慶貴、趣味は音楽鑑賞。ジャンルはだいたい何でも。ジャズにロックに、クラシック。あ、もちろん洋楽も邦楽も聴くけど。音楽は好き？」
　ニコニコと楽しげに森下君が僕を真っ直ぐに見る。すごく音楽が好きなんだろう。でも残念なことに、僕は音楽にはあまり詳しくない。ＴＶで流れる曲をなんとなく聴いていたりするだけなので、タイトルや歌ってる人の名前がわからないことの方が多く、その時のフィーリングや自分の好みで好きとか嫌いで分ける程度なのだ。
「ごめん。音楽は好きなんだけど、あまり詳しくなくて……」
　受験勉強の時は無音だと色んな生活音がうるさく感じて気が散るので、歌詞が付いていないという理由だけで母所有のクラシックをヘッドフォンを着けて適当に流していた。なんだか歌詞があると言葉が頭に入ってきて勉強に集中できないし、その歌のフレーズが耳についてしまってイライラして勉強の邪魔になるのだ。そんな感じなので、聴いていたクラシックの曲とタイトルが一致するかどうかも怪しい。音楽は嫌いじゃない。むしろ好きだって思う。
　だけど、なんだか色々と心に余裕が無くて……。
　だから、せっかく向こうが話題を振ってくれたのに、僕はそれに応えることができなかった。
「そっか。もしよかったら、今度お勧めのＣＤを貸すよ。千秋も気に入ってくれるとオレも嬉しいし」
　照れたようにぽりぽりと頬を掻いて僕に微笑みかける。
「うん……って、森下君、名前呼び捨て」
　初対面でいきなり呼び捨て？　僕の常識の中ではありえなかったことなので驚いてつい言葉が口から出てしまった。
「嫌ならやめるけど、駄目か？」
「駄目じゃないけど……慣れてなくて」
　あんな失態を晒して、その上森下君の厚意に応えることが出来なかったにもかかわらず、彼は僕に優しい笑顔を向けてくれる。
「窓開けてもいいか？」
　森下君が不意に言った。
「別にかまわないよ」
　窓を開けると、温かな春の匂いがする風が入り込んできた。それはまるで森の中にいるかの如く空気が一変する。これは僕の感覚的なモノでしかなく、理解してもらおうというのは、無謀というものだ。
「さすがに、緑に囲まれているだけはあるな、新緑の匂いがする」
　僕が感じていた様に森下君も同じような感覚なのだということに、共感を覚えた。
「僕、人付き合いが苦手で同室者と仲良くなれるかどうか心配だったけど、森下君で本当によかったって思うよ」

「それは千秋の人柄だと思う。正直で素直な所をオレは気にいったんだから」
「え？」
　なんだか今までになかった反応なので戸惑ってしまう。でもその反面、すごく嬉しくもある。
　こんな僕のことを最初から拒みもせずに自分の意見を言ってくれた人はいなかった。
　本当に、森下君はすごく不思議な人だなって思う。なんというか、森下君からは全く嫌な感じがしないのだ。ちゃんと僕と向き合ってくれているのがわかる。何故か、この人ならば信じられると思えてしまう。そんな毛羽立って荒みがちな心を持つ僕には、彼の傍はとても居心地が良かった。僕を無条件で受け入れて、理解しようとしてくれるのを肌で感じる。これで二人目だ。そうまけい、そう彼と同じように最初から僕を受け入れてくれたのは……。
　まぁ……ね。こんな目に見えないような感覚的なコトばっかり言ってるから、周りに理解されないってのも一応わかってはいるんだけど……。それでも、ちゃんとお互いを知る為には僕のことを知ってもらうって、必要なことなんじゃないのかなと思う。お互いに誤解したままで付き合うっていると、必ずどこかで齟齬が生じて、そこから亀裂が入っていき必ずうまくいかなくなる。それならば、僕のことをまず知ってもらって、最初からお互いにそうゆう付き合い方をすればいい。だからこそ、それで分かり合えない時は仕方がないとキッパリ諦めるしかない。無理やり僕の考え方を押し付けるわけにもいかないし、逆に押し付けられても困る。
　こうやってキッパリ・ハッキリ言い過ぎる所も嫌がられる原因の一つだってことは十分に承知している。でも、友達は少数精鋭で良いと思ってるので、僕はついつい自分の意見を正直に言ってしまう。それで嫌われたのなら、仕方がない。辛いけど。
　つまり何が言いたいかというと、ちゃんと向き合ってくれる人に対しては、誠実でいたいってこと。それが相手に対しての、最低限の礼儀だと僕は思うから。
「はじめて言われた。いつもは違う反応が返ってきてたから……」
「それは、お互いを知って仲良くなろうとしないからだろ？」
「そうだね。僕もそう思うよ」
　うん。こうやって自分の意見を言ってくれて、それに対して僕も意見が言える。
　これこそが僕の理想とする本来友達のあるべき姿だと思う。僕は今すごく幸せだなって思う。みんなにとっての当たり前が、僕にとっては遥か彼方の雲の上の出来事のようにすごく遠くて、それに触れられただけでもすごく幸せで、すごく嬉しい。
「それよりさっさと片付けちまわないとな」
　意見の同意を得られたことに照れつつ、慌てて片付けを始めた森下君の背中に笑顔で返事を返す。「そうだね」って。
　きっと森下君となら大丈夫。これからの１年間、僕達はうまくやって行けそうだ。

桜幻想

http://p.booklog.jp/book/123005

著者：相沢　遥
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/aizawaharuka/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/123005

相沢　遥のブログ
https://ameblo.jp/haruhai/?frm_id=v.mypage-ameblo--myblog--blog

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト